



公益社団法人 **日本地震工学会**
Japan Association for Earthquake Engineering

JAEE NEWSLETTER

編集 日本地震工学会 情報コミュニケーション委員会
 委員長 小檜山 雅之
 副委員長 久田 嘉章
 委員 久保智弘 佐伯 琢磨 多幾山 法子 富田 孝史 皆川 佳祐 畑山 健

第 8 号

公益社団法人 日本地震工学会
 〒108-0014 東京都港区芝 5-26-20 建築会館 4F
 TEL 03-5730-2831
 FAX 03-5730-2830
 Website: <http://www.jaee.gr.jp/>

2014年7月30日 発行

特集 各賞の受賞者から

5月22日に開催された本会第2回社員総会のあと、平成25年度功績賞・功労賞の贈呈式、ならびに論文賞・論文奨励賞の贈呈式・記念講演が行われました。今号のJAEE Newsletterでは、受賞者の方々から業績・研究の紹介をしていただきます。

論文賞

原子力サイトにおける2011東北地震津波の検証

(掲載巻号：Vol. 13 (2013年)、No. 2 (特集号「2011年東日本大震災」その3))

杉野 英治((独)原子力安全基盤機構)、呉 長江(同)、是永 真理子(伊藤忠テクノソリューションズ(株))、
 根本 信(応用地質(株))、岩淵 洋子((独)原子力安全基盤機構)、蛭沢 勝三(同)

この度は、2013年度日本地震工学会論文賞を賜り、大変光栄に存じます。本研究は、東北地方太平洋沖地震津波(以下、東北地震津波)による福島第一原子力発電所事故を踏まえて実施した、旧原子力安全基盤機構(JNES)の緊急プロジェクトの成果をまとめたものです。JNESの地震動・津波ハザード検討会の委員各位より貴重なご意見を頂き、心より御礼申し上げます。また、本研究の実施に当たり、観測津波波形や観測地殻変動等の公開データを利用させていただきました。この紙面をお借りして深く御礼を申し上げます。

2011年3月11日に発生した東北地震津波は、福島第一原子力発電所に重大な事故をもたらしました。また、福島第二、女川、東海第二の各原子力発電所にも被害を及ぼしました。著者らは、福島第一原子力発電所の事故等を教訓とし、今後の原子力発電所の津波対策強化と安全性向上に生かすため、東北地震津波の波源を推定し、各原子力発電所に襲来した津波の再現及び各原子力発電所間の津波高の差異に関する分析を行いました。その主な結果は、次の通りです。

- (1) 東北地震津波の推定波源モデルは、上記の4ヶ所の原子力発電所の痕跡高及び、広域の観測記録(津波波形と地殻変動量)を良好に再現することができました。特に、津波波源モデルのパラメータとしてすべり分布の経時変化を考慮したことにより、観測津波波形に見られた特徴的な波形を再現することができました。
- (2) 20秒を超える長周期地震動から推定された震源断層モデルと上記の津波波源モデルを比較したところ、それぞれ異なる観測記録から得られたものであるが、いずれも大きなすべりが日本海溝付近の浅い部分に集中する点で一致することから、津波発生要因となる地殻変動は長周期地震動と強い相関があることを示しました。
- (3) 原子力発電所の津波高に大きな影響を及ぼす波源の領域は、各原子力発電所で

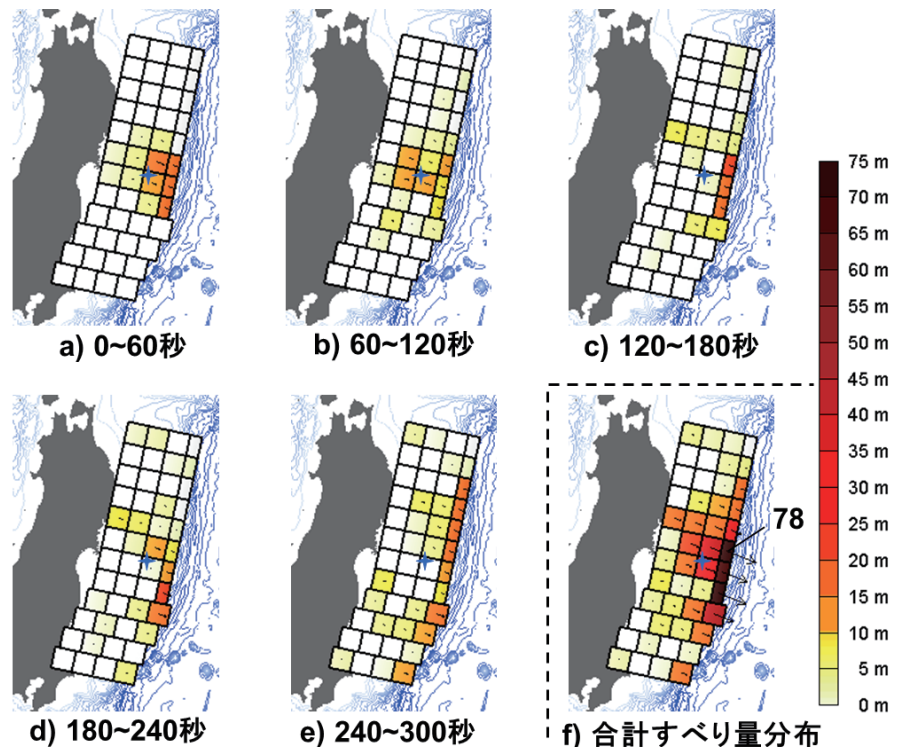


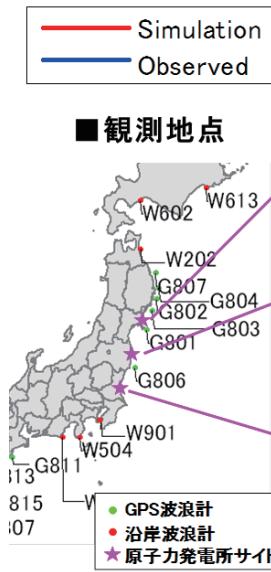
図1 津波波源モデルのすべり分布の経時変化

SPECIAL TOPICS - 特集 各賞の受賞者から -

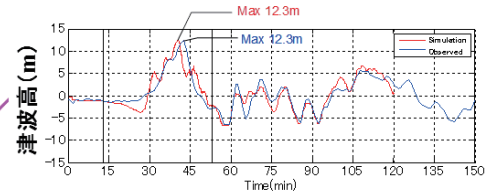
異なるものの、いずれも波源全体の一部に集中し、日本海溝付近のいわゆる津波地震型の地震発生域であることを明らかにしました。

(4) 福島第一と福島第二の両原子力発電所における津波高に差が生じた要因は、発電所近傍の浅部海域における津波の屈折・反射の影響よりもむしろ、遠方の波源と両原子力発電所の位置関係に基づく津波伝播経路の違いに起因して、複数の小断層（波源の一部）から発生する波形の重なるタイミングの違いであることを明らかにしました。

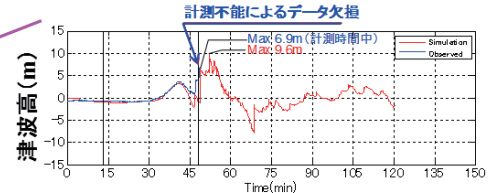
東北地震津波の規模は我が国の数百年程度の歴史記録には見られない巨大なものでした。これは、原子力発電所の設計やリスク評価の分野にとって重要な教訓です。今後、受賞論文の知見を活かしてこれらの分野に取り組んでいきます。



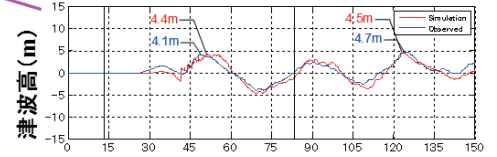
女川原子力発電所(★)



福島第一原子力発電所(★)



東海第二原子力発電所(★)



地震発生からの経過時間 (分)

*福島第二では計測不能につき観測記録がない。

((独)原子力安全基盤機構(現、原子力規制庁 技術基盤グループ)・杉野英治)

図2 原子力発電所の観測津波波形と解析波形



論文賞を受賞された方々と安田進会長(左から根本信氏、是永眞理子氏、安田進会長、杉野英治氏、呉長江氏、岩淵洋子氏)

功労賞

2011年6月～2013年5月に総務理事として理事会の企画・運営全般を担当され、公益社団法人化に貢献された矢部正明氏((株)長大)、ならびに長年にわたり事務局長として本会全般の運営に多大な貢献をされた鳴原毅氏((公社)日本地震工学会)のお二人が功労賞を受賞されました。



功労賞を受賞された鳴原毅氏(左)と矢部正明氏(右)

SPECIAL TOPICS - 特集 各賞の受賞者から -

功績賞

超高密度リアルタイム地震防災システム「SUPREME」の開発と運用

東京ガス株式会社

この度は日本地震工学会功績賞を賜り、大変光栄に存じます。表彰いただきました「SUPREME」は、大地震における都市ガスによる二次災害防止のため、約4,000箇所の地震計（SIセンサー）の情報を収集し、必要に応じて地域のガスの供給を停止することのできる“リアルタイム地震防災システム”です。

「SUPREME」の特徴は、地震計の密度と独自に整備した地盤データに基づく被害推定機能にあります。

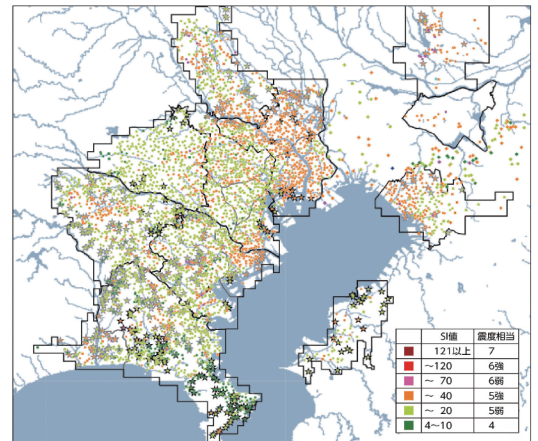
「SUPREME」で用いる地震計は、主に輸送に用いる中圧のガスから一般需要に供する低圧ガスに整圧する地区ガバナと呼ばれる施設の全て（約4,000箇所）に設置され、その密度は約1km²に1箇所となり、非常に高密度な観測を実現しています。さらに地区ガバナには感震自動遮断機能を備え、一定以上のSI値を観測すると安全のため自動でガスを遮断します。

また、このように超高密度に観測した地震情報（SI値）を元に、6万のボーリングデータから整備した50mメッシュ単位でのSI値増幅度・管網データを利用して、発災直後に迅速な被害推定を行うことができます。

これら地震情報・被害推定情報を元に、必要に応じてコントロールセンターから地域のガス供給を遠隔操作にて遮断することも可能となっています。

この「SUPREME」システムは2001年より運用を開始し、先の東日本大震災においても約5分間で地震の情報を収集、発災15分後には被害推定結果を出力し、供給停止の可否に関する迅速な意思決定を支援しました。

このような地震防災に対する取り組みと、東日本大震災における実績が評価され、このような荣誉ある賞を頂けたと認識しております。これからも地震によるガス事故防止・早期復旧のため、さらなる努力を重ねて参る所存です。



東日本大震災における SUPREME 観測図

全国統一基準による地形・地盤分類250mメッシュマップの構築と提供に対する貢献

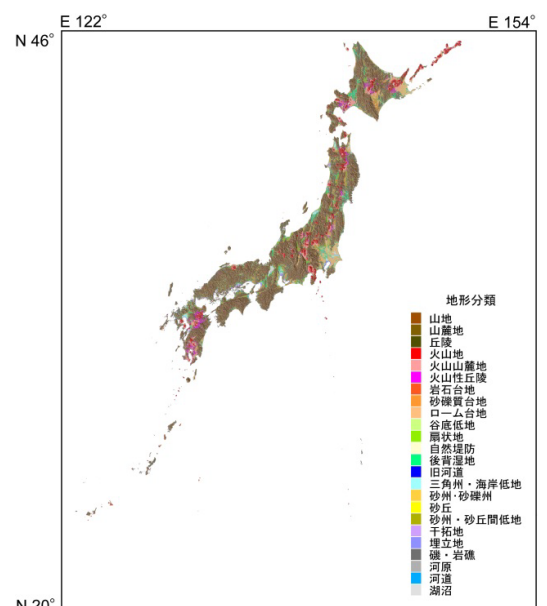
若松 加寿江（関東学院大学）・松岡 昌志（東京工業大学）

この度は、平成25年度日本地震工学会功績賞を賜り、大変光栄に存じます。受賞対象となりました地形・地盤分類250mメッシュマップの構築には、多くの方のご協力とご支援を頂きました。この紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。

地形・地盤分類250mメッシュマップとは、日本全国の地形・地盤条件を24種類の微地形区分に統一的に分類し、4分の1地域メッシュに属性を持たせた総メッシュ数約600万個のGISデータベースです（右図）。地震災害などの地盤条件に起因するハザードを全国統一的に評価することを目的として構築しました。このデータベース構築の経緯は、先に構築した基準地域メッシュ（約1km四方）のマップに遡ります。1995年の阪神・淡路大震災の後に、全国的な地震計ネットワークや全国規模の地震防災システムが構築され、いわゆるリアルタイム地震防災システム整備の機運が急激に高まっていました。これらのシステムの構築に不可欠な統一的かつ全国的な地盤データは未整備でその開発は喫緊の課題でした。このような背景から、地形・地盤分類メッシュマップを5年がかりで構築しました。その後、より空間解像度が高いハザード評価への利用という社会的要請に応じて構築したのが、地形・地盤分類250mメッシュマップです。データは2009年より防災科学技術研究所のwebサイトから公開されており、文部科学省地震調査研究推進本部が公表する全国地震動予測地図や、内閣府中央防災会議、都道府県の地震被害想定調査など多方面で利用して頂いております。今後は地震災害以外の自然災害のハザード評価や土地利用適正評価の基礎データなどとして、より幅広い用途への利用の推進も図っていきたく考えています。



松岡昌志氏（左）と若松加寿江氏（右）



地形・地盤分類250mメッシュマップ

SPECIAL TOPICS - 特集 各賞の受賞者から -

論文奨励賞

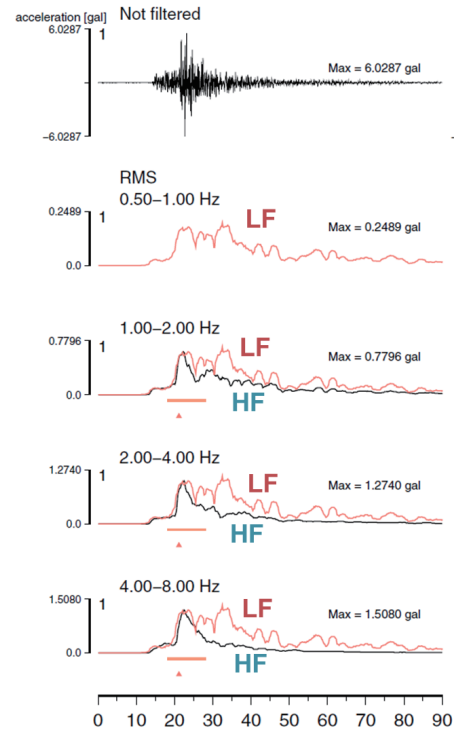
低周波数地震動の情報を用いた高周波数地震動合成の試み—関東地域における検討— (掲載巻号: Vol. 13 (2013年)、No. 4)

岩城 麻子 ((独)防災科学技術研究所)

この度は 2013 年度日本地震工学会論文奨励賞を頂き、大変光栄に存じます。ご選考いただきました先生方に御礼申し上げます。また、原稿を丁寧に見ていただきました編集者・査読者の皆様に深く感謝いたします。

本研究は、広帯域地震動予測のために高周波数地震動を合成する新しい手法を提案したものです。広帯域地震動予測において、およそ 1 Hz 程度よりも低周波数側(周期 1 秒程度よりも長周期側)では、震源モデルと地下構造モデルに基づいて決定論的に地震動を計算することができます。それよりも高周波数側では、それとは全く独立に統計的手法等を用いて計算し、接続周波数帯でそれぞれを足し合わせるのが一般的です。しかし、自然現象としては低周波数と高周波数の地震動は互いに独立ではないはずで、本論文では、まず、低周波数と高周波数の観測地震動(加速度エンベロープ)が S 波立ち上がり部において互いによく似ていることを示しました(図)。これは、低周波数地震動が与えられた場合に、それ自体を利用して高周波数地震動を合成することができる可能性を示唆しています。そこで、観測記録から得られた周波数帯間の地震動特性の関係をサイトごとに抽出し、あらかじめ決定論的手法で計算しておいた低周波数地震動と掛け合わせることで高周波数地震動を合成する手法を提案しました。

この手法では、M8, 9 クラスの地震への対応や、震源のごく近傍、あるいは遠く離れた地震動への対応など、取り組むべき課題も多くあります。今回の受賞を励みとして、手法の拡張・改善のための研究を続け、広帯域地震動予測手法の高度化に寄与することを目指していききたいと思います。



K-NET IBR011 (つくば) 観測点における地震動加速度記録とオクターブ周波数帯域ごとのRMSエンベロープの例

等価線形化法による木造住宅の地震時応答推定とその精度

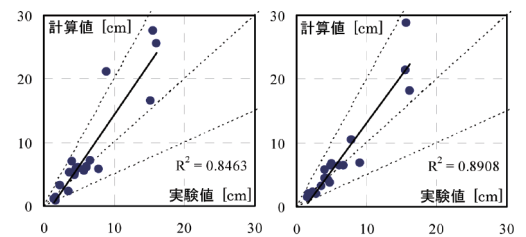
(掲載巻号: Vol. 13 (2013年)、No. 3))

長岡 修 (清水建設(株))

この度、2013年度日本地震工学会論文奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。また、五十田博先生(当時信州大学教授、現京都大学教授)には、大学在学中からこれまでご指導頂き、この紙面をお借りして深く御礼申し上げます。

本論文では、木造建物、特に住宅を対象に等価線形化法を適用し、地震時の最大応答変形を求め、時刻歴応答解析や実大振動台実験の結果との比較によって、その追跡精度を確認するとともに精度向上や簡易化を図る可能性について述べたものです。具体的には、地震入力を決定づける周期を最大応答変形の関数として表現する検討や等価粘性減衰定数に関する検討を実施し、求めた周期や等価粘性減衰定数を用いて応答変形を追跡しました。その際、既往の研究で用いている手法との精度比較も実施しています。

比較検討の結果、個別の地震動のパラツキもありますが、最大変形を変数とする有効周期を定義することによって非線形系のエネルギー入力を表現できること、等価粘性減衰定数についてはその振幅履歴によって変化するためスリップ型に対して関数化は難しいことが明らかになりましたが、本研究で用いた手法により既往の研究と同等以上の精度で応答変形が追跡できることを示しました。今後は、地震エネルギーを適切に表現できる有効周期と地震波の継続時間に相関性を見出し、応答手法の精度向上と簡易化の確立を目指す予定です。



a) 等価線形化法 b) 時刻歴応答解析
最大応答変位の比較による精度検証



長岡修氏(左)と岩城麻子氏(右)

NEWS WATCH - 最新の研究・開発情報 -

現地調査

2014年4月1日チリ・イキケ沖の地震および津波の現地調査

被害の把握

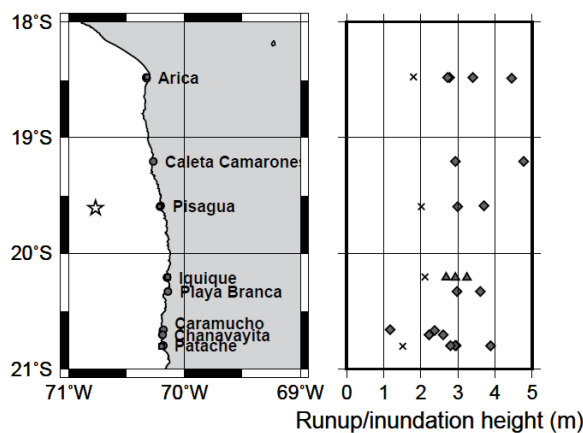
2014年4月1日20:47分頃（現地時間）にチリ北部のイキケから北西約100km沖合を震源とするMw8.2の地震が発生し、津波が沿岸に来襲した。津波の実態を把握するために、SATREPSチリ津波防災プロジェクト（会誌19号、2013年6月において紹介）が現地調査を実施した。イキケはSATREPSプロジェクトにおいてパイロットサイトの一つにした地域であり、港湾BCPや防災教育手法などの研究開発とともに、避難の重要性など東日本大震災から得た教訓を防災担当者や市民に伝えてきた地域である。

下図は検潮所で観測された最大津波高（×印）、現地調査で測量された津波の遡上高（◆印）および浸水高（▲印）である。観測記録よりも高い津波が沿岸に来襲したことが、しかしチリ北部では海面から3m程度以上の所に住家などがあるために甚大な浸水被害に至らなかったことが現地調査から明らかになった。調査過程で話を聞いた住民は、地震の揺れ、津波警報・避難命令のサイレンおよび過去の津波被害の知識による危機意識によって津波来襲前に逃げていた。さらに、それまでに参加した避難訓練が実際の避難に役立ったと語る人もいた。避難行動については引き続き調査を実施している。

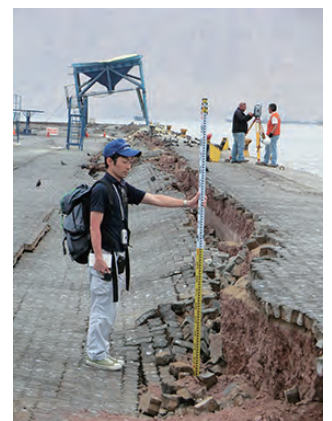
一方、地震被害は大きく、構造的な被害の発生した多数の住家や倉庫、本震だけでなく余震によっても被害が拡大しているイキケ港の未耐震対策の埠頭（右写真）などがあつた。また、イキケ市内ではレストランを火元とする火災が3箇所発生した。しかし、その周囲はコンクリート造の建物で囲まれていたことから延焼は極めて限定的であった。

現地調査の詳細に加え、震源域の推定など現地調査報告会の報告資料が参考になる。

（港湾空港技術研究所・富田孝史）



津波の遡上高（◆）、浸水高（▲）および観測高（×）



イキケ港の埠頭の地震被害

SATREPSチリ津波防災プロジェクト <http://www.pari.go.jp/special/special3/>
 イキケ沖地震津波の現地調査報告会 <http://www.pari.go.jp/special/special3/activities/>

耐震工学研修

中南米地震工学研修

ラテンアメリカの人材育成

中南米（ラテンアメリカ）諸国は地震が頻発する地域であるが、耐震建築の技術普及が遅れており、地震による建物倒壊でこれまで多くの人的・物的被害が発生している。独立行政法人建築研究所は、これまでメキシコ、ペルー、チリ、エルサルバドル、ニカラグア等で、独立行政法人国際協力機構（JICA）の技術協力プロジェクトに関与すること等により、耐震工学関係の技術協力を実施してきた。また、国際地震工学センターでは、それらの国々以外の中南米諸国からも大勢の研修生を受け入れてきた。このような状況と、中南米地域が元々英語圏ではないことを考慮し、建築研究所とJICAでは、平成26年度から「中南米 建物耐震技術の向上・普及」研修（使用言語：スペイン語）を実施している。

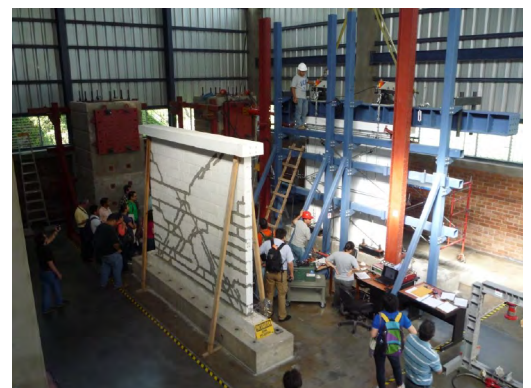
本研修は、研修生が耐震設計・施工・診断・補強の技術と制度を、講義・構造実験・現場見学から学ぶことにより、自国での耐震建築の普及や、将来の地震被害の軽減に貢献することを、目的としている。平成26年度には、ドミニカ共和国、エルサルバドル、ニカラグアおよびペルーの4か国から14名の研修生が参加した。研修生は皆熱心に講義を受けた。研修終盤には、エルサルバドルに移動して、在外研修が実施された。

（建築研究所国際地震工学センター・犬飼瑞郎）

中南米地震工学研修 <http://iisee.kenken.go.jp/japanese/?p=latin>



平成26年度研修の集合写真



在外研修（エルサルバドル中米大学実験施設における壁実験）

SPECIAL TOPICS -新潟地震から50周年-

新潟地震とライフラインと私

リアルタイム地震・防災情報利用協議会 顧問 片山 恒雄

新潟地震が起きたとき、私はシドニー（オーストラリア）の大学でティーチング・フェロー兼博士課程の学生だった。だから直後のことは知らない。新潟地震を研究の対象として考え始めたのは、70年代の終わりごろのことだ。78年に宮城県沖地震が起きて、仙台市のライフラインに支障をきたした。今から考えれば、決して大被害ではなかったが、それまでモノが壊れることを主な対象にしていたエンジニアにとっては、新しい形の都市型の地震災害だった。

宮城県沖地震の被害調査をしていたとき、「そう言えば、64年新潟地震のライフライン被害はまだ誰も調べていない」ということに気付いた。地震発生から、すでに15年が経っていたから、資料も散逸していて、調査は簡単ではなかった。

だが、色々なことがわかってきた。水道やガスの供給停止は長く続いた。断水は、多くのところで3週間から4週間、東新潟では6週間続いたところもあった。被害を受けたパイプをいちいち掘り出し、修理して埋め戻すのでは、いくら時間があっても足りない。そこで、道端に仮の水道管を浅く埋めて、50メートル程度ごとに共用の水道栓をつけた。はじめは、パイプを道端に転がしていたが、車の出入りの邪魔になるということで、浅い埋設に変更した。地震が起こったのは6月16日、ほぼ全世帯に水が行きわたったという7月30日の段階で、新潟市の半分の人たちはまだ道端の水道栓を使っていた。それでも水道はいい方だった。ガスの復旧は、10月、11月、12月までずれ込んだところが少なくない。冬になる前には復旧するという突貫工事にもかかわらず、6ヶ月を要したところがあったわけだ。新潟市にはまだ下水道はなかった。

こういった都市供給施設の被害で命を落とされる方はなかろう。しかし、半世紀前と今では、これらライフラインに依存する度合いも、依存の仕方もまるで違う。また、新潟地震当時の新潟市の人口は50万人強といったところだから、首都圏での問題を検討するときどこまで役に立つかは疑問だ。地方都市は地方都市なりの課題を抱えている。64年に50万人程度だった新潟市の人口は、広域合併によって今は80万人を突破したが、今後増加し続けることはないだろう。そんな中で、2020年には、65歳以上の高齢者が30%近くに達するという予測がある。

新潟地震は、たいへんな災害だった。だが、日本という国全体から見れば局所的な災害であり、しかも、日本が右肩上がりの成長を始めた時点の災害だったことをよく考えておく必要がある。



写真1 県営アパート



写真2 昭和大橋と新潟市街

左の2枚の写真は、防災科学技術研究所の1964年新潟地震オープンデータ特設サイトより引用。

新潟地震を見て学ぶサイトの紹介

防災科学技術研究所の1964年新潟地震オープンデータ特設サイト

防災科学技術研究所は、1964年新潟地震の発生50年の節目に、所蔵する空中写真とスナップ写真をオープンデータとして公開している。<http://ecom-plat.jp/19640616-niigata-eq/>

日本地震工学会「1964年新潟地震直後に撮影された写真に基づく液状化被害の状況」

日本地震工学会は、「1964年新潟地震直後に撮影された写真に基づく液状化被害の状況」を公開している。
<http://www.jaee.gr.jp/jp/2014/06/09/4771/>

(IC委員会・佐伯琢磨)

EVENT REPORT

「東日本大震災合同報告 共通編3編」刊行記念シンポジウム 「地震災害再考. ファンダメンタルをふまえて」開催報告

2014年6月13日に東京の専売会館ホールで行われた標記シンポジウムに参加しました。今回刊行されたのは、日本地震工学会、土木学会、日本建築学会、地盤工学会、日本機械学会、日本都市計画学会、日本地震学会、日本原子力学会の8学会が合同編集委員会を設置して作成を進めている東日本大震災合同報告書のうちの共通編1「地震・地震動」（日本地震工学会）、共通編2「津波の特性と被害」（土木学会）、共通編3「地盤災害」（地盤工学会）の3編で、それぞれの中心となった3学会の主催で開催されました。

梅雨らしい日が続いていた東京ですが、この日は久々に朝から夏のような陽射しの照りつけるなか、会場には多くの聴衆が詰めかけ、開始時には空席を見つけるのに苦労するくらい大入り満員の状態でした（写真1）。後から聞いたところによると、当日の参加者は約140名だったそうです。

合同調査報告書編集委員会委員長の和田章先生（東京工業大学名誉教授）による開会のご挨拶（写真2）の後、前半は発刊された報告書の内容について6名の先生方からご講演がありました。1冊について1時間、というかなり厳しい時間の制約があるなかで、どの先生方も要点をわかりやすくまとめてご発表いただき、専門外の事項についてもより理解を深めることができたように思いました。後半は、前半ご講演いただいた6名の方をパネリストに迎え、「ファンダメンタルをふまえた巨大災害対策」というテーマでパネルディスカッションによる討議が行われました（写真3）。この震災で顕在化した長周期地震動や複合災害に関する課題、さらには対策による便益をどう考えるかという難しい問題まで、進行役を務める本田利器先生（東京大学教授）から時折繰り出される鋭いジャブ（？）のような問題提起も功を奏して、大変活発で有意義な議論が繰り広げられました。予定された90分はあっという間に過ぎ去り、合同調査報告書編集委員会副委員長の川島一彦先生（東京工業大学名誉教授）の閉会のご挨拶ののち、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。なお、日本地震工学会誌No. 23（10月刊行予定）では、本シンポジウムで議論された内容が詳しく紹介される予定とのことですので、ご興味のある方はそちらもぜひご覧ください。

震災から3年が経ちますが、パネルディスカッションでの討議を拝聴して、諸問題の解決には専門を超えた連携が重要であることを改めて痛感しました。その点で、異分野の専門家が集まり、お互いに自由闊達に意見を交わすことのできる当学会の存在意義は大きいのではないかと思います。今後も、当学会の活動を通じて地震災害の軽減に貢献できることを願っています。

（大林組・副島紀代、写真は鳴原毅氏撮影）



写真1



写真2



写真3

ブックマーク 地震工学を知るための書籍の紹介

日本地震工学会をはじめとする8学会合同で編集している東日本大震災合同調査報告のうち、最新刊（平成26年4月および6月刊行）についてご紹介します。

東日本大震災合同調査報告 共通編2「津波の特性と被害」、共通編3「地盤災害」

共通編2「津波の特性と被害」には、東北地方の津波災害の歴史や東北地方太平洋沖地震における津波の発生機構、観測状況、被害状況、シミュレーション、海岸堤防などの被災メカニズム、復旧・復興など、重要な知見がまとめられています。

共通編3「地盤災害」には、被災地域の地形・地質・地盤、地表地震断層の発生、造成宅地・液状化・斜面・地盤環境の復旧と被害について、重要な知見がまとめられています。

合同報告書は全29巻刊行予定（すでに4巻刊行）です。セット割引価格や関係学会会員価格でも入手可能です。（IC委員会・皆川佳祐）



JAEE COMMUNICATION

連載コラム 鯨おやじのおせっかい

連載コラム、「鯨おやじのおせっかい。」武村雅之先生（名古屋大学）の連載コラム第3号をお届けします。

その3 新緑ピクニック

去る5月18日日曜日、私の住む名古屋市千種区の猫が洞通り周辺で、「新緑ピクニック」という催しをやりました。私は長年、様々な観点から関東大震災を研究してきましたが、一昨年名古屋大学減災連携研究センターに赴任し、それ以来東海地方に残る過去の地震の慰霊碑や復興碑や遺構を調べてきました。

その結果、意外にも名古屋に関東大震災の犠牲者を弔う慰霊堂と慰霊碑があることを知りました。それも一つや二つではなく、慰霊碑については三つも確認できました。一つを除いてすべてが近くの日泰寺にあります。日泰寺は明治の終わりのころシャム（今のタイ）の国王から日本国民に日泰友好の証として下賜された仏舎利を奉安するために生まれた全国でも珍しい超宗派の寺院です。誘致を希望する多くの地域がある中で、当時の名古屋市民が一致協力して誘致に成功した名古屋の誇りともいえるべきお寺です。名古屋での避難者救済の様子や日泰寺の慰霊堂や慰霊碑のことは前回は紹介しましたが、当時の人々の優しさを今の市民にも知って欲しいと昨年に引き続き企画したのが「新緑ピクニック」です。

主催は、猫が洞通りのMittE（ミッテ）というレストランで、シェフの松井りえさんが、10種類もの野菜をちりばめた春のお弁当を作ってくれ、デザートにはこれも近所にあるパティスリーグラムさんの焼き菓子が付きました。私の先導で午前中、上記の慰霊堂や慰霊碑の外に、これも関東大震災の際のいわゆる甘粕事件で犠牲となった橘宗一のお墓や、東南海地震や濃尾地震に関連するものを日泰寺で見学、さらに近くの猫が洞池で池の成り立ちや変遷を勉強して、最後に新緑まばゆい池畔の広場において参加者全員でお弁当とデザート、そしてビールに舌鼓をうちました。

参加者は近所に住む方々を中心に私と同じ職場のメンバーも含め、女性16名、男性12名、子供5名の総勢33名でした。家族づれの外に、友達同士や娘とお母さんなど、日ごろ地震や防災・減災とは無縁と思われる方々に集まっていただけでした。私の



見学会の後はみんなでおいしいお弁当！

そして最後に、防災マップの説明会（猫が洞池の芝生にて）

妻も東京から手伝いに来てくれました。お弁当を食べながらの自己紹介を何うと、ミッテのお弁当に釣られて来られた方が多くいました。中には瀬戸内寂聴の「美は乱調にあり」を読んで橘宗一のお墓に是非行きたいと来られた女性もおられました。

今回の企画には、愛知県防災局の山本さんがスタッフとして、また名古屋市の防災マップ担当の山田さんが、各戸に配布されているハザードマップの説明に駆け付けてくれました。私も含めてすべてが個人としてのボランティアです。

東日本大震災のあと、各地で減災のための企画が模索され、まさに減災維新の様相を呈しています。主流にはならないまでも、今回は、鯨おやじのおせっかいの一つとして、わが町でみんなが楽しめる減災企画の試みを紹介させていただきました。

（名古屋大学減災連携研究センター・武村雅之）

JAEE CALENDAR

日本地震工学会イベント情報

第5回震災対策技術展（仙台）セミナー 「次の津波からどう逃げるか ～渋滞リスクを減らす作戦を考える～」

日程：2014年8月7日(木) 14:45～16:15
 場所：AERビルD会場（仙台市青葉区中央1丁目3番1号）
 詳細：http://www.exhibitiontech.com/etec_miyagi/access.html

第14回日本地震工学シンポジウム(2014)

主催：日本地震工学会(幹事学会)ほか
 日程：2014年12月4日(木)～6日(土)
 場所：幕張メッセ国際会議場（千葉市美浜区中瀬2-1）
 詳細：<http://www.14jees.jp>

関連学協会の行事等

The 12th International Conference on Motion Vibration Control

主催：日本機械学会
 日程：2014年8月4日(月)～6日(水)
 場所：札幌コンベンションセンター
 （札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1）
 詳細：<http://www.jsme.or.jp/conference/MOVIC2014/index.html>

土木学会による実務者のための耐震設計入門：基礎編

主催：土木学会
 日程：2014年8月7日(木)
 場所：土木学会 講堂（新宿区四谷一丁目外濠公園内）
 詳細：<http://www.jsce.or.jp/event/active/information.asp>

Second European Conference on Earthquake Engineering and Seismology

主催：European Association of Earthquake Engineering,
 European Seismological Commission
 日程：2014年8月24日(日)～29日(金)
 場所：Istanbul, Turkey
 詳細：<http://www.2eecesistanbul.org/>

関連学協会の行事等

第63回理論応用力学講演会

主催：日本学術会議 「機械工学委員会, 土木工学・建築学
 委員会合同IUTAM分科会」
 日程：2014年9月26日(金)～28日(日)
 場所：東京工業大学大岡山キャンパス
 詳細：<http://news-sv.aij.or.jp/nctam/63/>

5th Asia Conference on Earthquake Engineering (ACEE 2014)

主催：National Center for Research on Earthquake
 Engineering (NCREE)
 National Taiwan University (NTU)
 日程：2014年10月17日(木)～18日(金)
 場所：台北市, 台湾
 詳細：<http://ACEE2014.ncree.org.tw>

2014年 環境工学国際ワークショップ

主催：一般社団法人日本機械学会
 日程：2014年11月19日(水)～20日(木)
 場所：つくば国際会議場（茨城県つくば市）
 詳細：<http://iwee-2014.net/>

学術フォーラム「東日本大震災・阪神淡路大震災 等の経験を国際的にどう活かすか」

主催：日本学術会議 土木工学・建築学委員会ほか
 日程：2014年11月29日(土) 10:00～17:30
 場所：日本学術会議講堂（東京都港区六本木）
 詳細：<http://jeqnet.org/sympo/>
 PDには当会を代表して安田会長が参加されます。

国際構造工学会 (IABSE) 2015年春季大会

主催：IABSE日本グループ(本会他、後援)
 日程：2015年5月13日(水)～15日(金)
 場所：奈良県新公会堂(奈良市)
 詳細：<http://www.iabse.org/>

JAEE Newsletterは、日本地震工学会の学会誌を補完するように、3カ月に1回の頻度(3、7、9、および12月)で発行されます。地震工学に関するトピックスや研究動向等について紹介してまいります。会員の皆さまからの記事の投稿を歓迎いたします。「ブックマーク」では、自薦・他薦を問わず書籍の紹介をお待ちしております。

連絡先：e-media2014@jaee.gr.jp

なお、JAEE Newsletterは以下でご覧いただけます。

<http://www.jaee.gr.jp/jp/stack/1925-2/>



訃報

Sheldon Cherry 先生

Sheldon Cherry 先生が2014年3月23日にカナダ・バンクーバーにてご逝去されました。

元IAEE会長であり、ブリティッシュ・コロンビア大学・シビルエンジニアリング名誉教授であったSheldon Cherry先生は、建築研究所の地震工学コースにも貢献される等、日本にもなじみの深い方であられました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

今号のJAEE Newsletterの刊行直前の6月には1964年新潟地震から50年の節目を迎えました。そして10月には2004年新潟県中越地震から10年の節目を迎えます。地震災害の軽減には、防災への高い関心の持続と、力を合わせた取り組み、努力の継続が必要です。次号のJAEE Newsletterでは2004年新潟県中越地震の特集を予定しています。また、日本地震工学会誌においても日本海東縁部の地震の特集を予定しており、連携して市民ならびに会員の皆様に向けた情報の発信を行い、コミュニケーションを活発化させたいと考えています。皆様からのご意見やご提案などをお待ちしておりますので、よろしくお願いたします。

第8号編集担当 小檜山雅之



公益社団法人 **日本地震工学会**
Japan Association for Earthquake Engineering

〒108-0014 東京都港区芝 5-26-20 建築会館 4F
TEL 03-5730-2831
FAX 03-5730-2830
Website: <http://www.jaee.gr.jp/>

Copyright (C)2014 Japan Association for Earthquake Engineering
All Rights Reserved.

<本ニュースレターの内容を許可なく転載することを禁じます。>